NOTEBOOK

あるべき未来に進むために

A 普通横罫 40枚 ノ−200PX

NOVEL

あるべき未来に進むために　終章ーside　Hyunckel

芳流（kaoru）

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=16578483

ダイの大冒険, ヒュンケル, アバン, 子ヒュン, 不死身の長兄

ヒュンケルの旅の終わり。ここで、本編終了。
あとは、後日談が２つほど入ります。もう少しだけお付き合いください。

もともと、この話は、デルムリン島で終わるはずでした。
しかし、思いのほか長くなったヒュンケル視点の後半の話からすると、これは、アバンsideの終章のみではヒュンケルの旅は終わらないだろうと思い、この話となりました。ヒュンケルに対して思うところの大半は、この話に詰めたつもりです。これが、私の一解釈です。

ここまで約２０万字、長いお話にお付き合いいただき、ありがとうございました。
すべての読者様に感謝いたします。

2021.12.11 ヒュンケルオンリーイベント「不死身の長兄」合わせ

あるべき未来に進むために　終章ーside Hyunckel

終章ーside　Hyunckel　想い出
　その建物は、５００年以上の時を経たにもかかわらず、創建当時の白さを残していた。
　純白の外壁には、様々な彫刻が施されており、現在も欠けることはなく残されている。街の者たちがよく手入れをしているからなのだろう。
　入口の両脇には、太い、大きな柱がそびえる。
　広い入り口には、ひっきりなしに、見物客が往来をしていた。
　建物には、この街の住人だけではなく、ここを訪れた旅人たちも見学に来ているようであった。旅装束の者たちも多く見かけた。
　アバンとともにこの街を訪れた少年ヒュンケルは、初めて見るその建物の大きさと繊細さに圧倒され、その外壁を仰ぎ見ていた。アバンは、そんな少年の様子を、微笑ましい面持ちで見守っていた。
　ヒュンケルは尋ねた。
「これが・・・お墓、なんですか？」
「ええ。霊廟ですね。」
「・・・こんなに、大きくて、綺麗なのに？」
　ヒュンケルにとっては、墓、というものは、街の外にあるうらぶれたもの、という印象しかなかった。それは、これまで訪れた街でもよく見かけたものだった。
　連綿と墓標の立ち並ぶもの悲しい光景、というのが、彼の持つ墓のイメージだ。そこには悲しみの色しかなかった。
　ヒュンケルだけではなく、たいがいの者にとってはそうだろう。
　だが、目の前のこの建物はどうだ。
　外から見ると、仰ぎ見るほどの大きさに、天へと伸びる尖塔、純白の外壁と、そこに施された様々なレリーフ。柱と柱を繋ぐアーチ。
正面のポーチには、半円形の上部を持つ重厚な扉があるが、来る者

を拒むことなく、開け放たれていた。
　内部には、何十人もの人間が入れるホールを持ち、天井も高い。
　そして、その最奥に、この霊廟の主が眠る神聖な空間があるのだという。
　アバンがつぶやいた。
「綺麗ですよね。
　この建物が建てられて、５００年が経つと言います。それなのに、これほどきれいに維持されている。それだけ、この霊廟の主が慕われていたということなんでしょう。
　信仰の場なんですね、ここは。」
「・・・敵国の人間なのに？」
　ヒュンケルがいぶかし気に尋ねた。
　アバンは苦笑した。
　この街は、ベンガーナのはずれにあり、すぐそばには、リンガイアとの国境がある。
　そして、この霊廟の主は、５００年前に、この地で戦った武将の男だ。世界のあちこちには、このように、かつての英雄や古代の王の霊廟が建てられており、それぞれ、信仰の対象になっていた。
　ただ、この霊廟が特殊なのは、ここに眠るのが、「リンガイア生まれの男」ということだ。この街は、ベンガーナの一角であるにもかかわらず。
　アバンは、ヒュンケルに答えた。
「そうですね。
　この霊廟に祀られている武将は、もともとはリンガイアの将軍でした。
　いまでこそ、この二国は友好国ですが、かつては戦端を交わらせたことが何度もありました。
　この将も、生まれ故郷のリンガイアのために何度も戦い、ベンガーナ軍を苦しめた。
　有能な将だったのですよね。
　それが、ある戦いの際に、ベンガーナの捕虜となった。そして、時の王に伏せられ、また、将の側も王に感銘を受け、彼のために戦うこととなった。

それからは、ベンガーナの将として戦い、生き、この地で生涯を終えた。
　それが今なお、この地で祀られ、人々の信仰の対象となっている。」
　だが、アバンの説明を聞いても、ヒュンケルは軽く頭を振って、不機嫌そうな表情を浮かべた。
「・・・わかりませんね。いくらベンガーナのために戦ったと言っても、もともとベンガーナにとっては敵だったのでしょう？
　簡単に主を変えるというのも信用できません。
　ベンガーナには、この将に家族を殺された者だっていたでしょうに。」
　その少年らしい潔癖さを、アバンは、微笑ましく思った。
　アバンは、解説をつづけた。
「戦乱の時代には、様々な王が立ちました。その中で、これはと思う人に、みんな、ついて行ったんです。
　この将の時代には、ベンガーナもリンガイアも、まだ今の国土を誇ってはいなかった。
　その中で、群雄割拠し、いまの国土と王家が築かれていったんです。
　この将を説得して引き入れた王は、いまのベンガーナ王家の祖です。
　ベンガーナの人々にとっては、この将も、いまのベンガーナ国家の基礎の一助となった人なんでしょうね。」
　だが、アバンの解説を聞きながらも、ヒュンケルはまだ難しい顔をしていた。アバンは、そんな一番弟子の様子に苦笑した。
「おや、まだ納得いかない、という顔をしていますね。」
　ヒュンケルは、アバンを見上げ、尋ねた。
「何故、ベンガーナ王は、この将を捕らえたときに、処刑しなかったのでしょうか？
　だって、敵だったのでしょう？
　有能な将ということは、ベンガーナにとっては憎い仇だったはずです。」
　アバンは、その言葉に、ヒュンケルの疑問を感じ取った。大きく

うなずくと、彼に答えた。
「戦乱の世では、いかに有能な将を味方に引き入れるかがカギになります。この将のように、仕える主を変えることも珍しくはありません。
　そして、その場合、もちろん、敵として戦った過去は問いません。
　だってそうでしょう？
　仕える主を変えて、文字通り命を懸けて戦っても、過去に敵として戦ったことを非難されたのでは、そんな王には誰もついてきません。
　この将についても、捕虜になったときに、王は、過去の戦いで、この将の犠牲になった者たちがいたことは不問に付した。
　だからこそ、この将は、ベンガーナのために戦ったのです。」
　ヒュンケルは、さらにアバンに尋ねた。
「でも、王は、それでいいとしても、街の人はどう思ったんですか？
　個人の思いは別でしょう？」
「それは、今のこの霊廟の姿がすべてを物語っていると思いますよ。」
　アバンは、穏やかに微笑んで、霊廟に視線を移した。つられて、ヒュンケルも師の視線を追った。
　ヒュンケルの目に、霊廟の白壁が映った。
　白壁は、維持が難しい。ましてや、この霊廟では、壁にレリーフまで施されている。それが、欠けることなく維持され、壁もまた、創建当時の白さを誇っている。
　街の人たちが、いかに腐心して、この霊廟を清掃し、補修し、維持してきたかがうかがわれた。
　アバンは、誰に聞かせるともなく、呟いた。
「・・・きれいですよね。」
「・・・はい・・・。」
　ヒュンケルも素直にうなずいた。
　アバンは、言葉をつづけた。
「ここの霊廟の維持運営のために、多額の寄付金が寄せられている

そうです。
　歴史的にも、この霊廟の主は、人気のある人なんですよね。
　兵を率いて戦うことにも長けており、様々な作戦を遂行した知将だったそうです。
　それだけではありません。
とにかく、強かった。
　剣での一騎打ちでは、負けたことがなかった。
　さらに、弓の名手でもあり、1000フィート以内なら、確実に頭部を射抜いたそうです。
　すごいですよね。」
　アバンの説明を聞きながら、少年は尋ねた。
「強さに対する尊敬・・・なんでしょうか？」
　この時のヒュンケルの理解は、あまりに表面的であったが、アバンはあえて否定はしなかった。そこに言葉を付け加え、彼の理解の深化を促した。
「それだけではありませんよ。
　この人には、様々な逸話があります。
　この将が、ベンガーナ軍に属し始めた頃、やはり、彼を恨む人は多くいたようです。家族や仲間を殺された、と言ってね。」
　そこまでは、ヒュンケルも予想していたことだった。彼は頷き、師の言葉の続きを待った。
　アバンは、言葉をつづけた。
「でも、この人は、そのことに対して何の言い訳もしなかった。
　実際に襲撃されたこともあったようでしたが、その思いを受け止めた。そして、彼を恨み、反発する人たちにも納得できるように、ベンガーナに貢献していった。
　彼が亡くなったときには、ベンガーナの人たちは、悲しみに暮れたそうですよ。
　その街の人たちの思いは、今もこの霊廟の姿に現れていますね。」
　そうしてまた、アバンは、霊廟を見上げた。
　その眼差しには、深い尊敬の色があった。
「敵対した過去もあった。でもそれだけじゃなかったのでしょう。

彼は、その後の人生を、ベンガーナと王のために生き、その誠意と忠誠を、身をもって示した。
そして、この人の生き方を、ベンガーナの人たちは目の当たりにした。
その成果を、生き様を、受け入れていったのでしょう。
見事な・・・一つの生き方ですね。」
ヒュンケルは、霊廟の壁に描かれたレリーフを仰ぎ見た。レリーフは、入り口の両脇から、ぐるりと建物を囲むように刻まれている。
主に戦いの場面が描かれたそれは、この霊廟の主の人生を追う絵物語だった。
その中で、子どもと思われるような小さな者に、戦士の男が、剣で刺される場面があった。だが、その次のレリーフでは、戦士の男が、少年と握手を交わしていた。
アバンのいう、襲撃された、とはこの場面のことか。
レリーフを追うと、戦いの場面がいくつも描かれ、また、凱旋のシーンもあった。
そして、最後のレリーフは、入口のすぐ左側に描かれていた。この彫刻で巡る彼の人生は、霊廟入り口の右側から始まり、ぐるりと一回りして、入口のすぐ左側で終わっていた。
その最後のレリーフには、病床の彼を囲み、大勢の人たちが嘆き悲しんでいるさまが描かれていた。
誠意と忠誠を示した、一つの人生の結末。
そして、それを受け止めた、かつてのこの街の住民の姿がそこにあった。

地底魔城の闘技場跡は、いまや、見る影もなく、鋭利な岩に覆われていた。
ただの岩ではなかった。マグマが冷えて固まった、溶岩だ。
冷えた溶岩は、鋭利な先端を持ち、上を歩く生き物の足を深く傷つけ、生きるものを近寄らせせようともしない。
ヒュンケルは、靴底の厚い軍靴で大地を踏みしめ、久方ぶりにこの闘技場跡に立った。

すり鉢状の闘技場であったこの場は、今は、荒れた岩に覆われ、もはや原形をとどめていなかった。
ここだけではない。
かつて、地底魔城と呼ばれ、魔王ハドラーの居城であったこの地は、その回廊や居室の大半にマグマが流入し、崩壊をした。
地下に向かってらせんを描くように築かれたこの城には、闘技場から噴出したマグマが、各通路を通って入り込んだ。
そして、その全てではないものの、複雑に入り組んだ通路や、広々とした高い天井を誇ったホール、豪奢な玉座、繊細な彫刻の施された壁など、あらゆるものが熱の海の中に沈んだ。
いまや、通路や階段を通って地下に下ろうとしても、どの通路が通れるのかも定かではなく、かなりの箇所が、途中で道がふさがれる状態になっていた。
だが、地下に築かれた地底魔城にあって、この闘技場は、数少ない空を仰ぎ見る場所であった。
そのため、マグマが流入して地底魔城が崩壊したいまも、この闘技場跡地には、外部から容易に立ち入ることができていた。
天井のないこの場には、ルーラやキメラの翼で入り込むことも可能であるうえ、壁を越えて、中に侵入することもできた。
誰よりもこの城の構造を熟知していたヒュンケルは、最も壁の低い個所からこの闘技場跡地に立ち入った。
ヒュンケルは、いまとなっては、動くものも何もないこの闘技場の真ん中に立ち、かつての光景をその瞼の裏に蘇らせていた。
この地は、彼にとって、ひどく思い入れのある場所であった。
まさにこの場で、彼は、おとうと弟子たる勇者ダイに敗れた。そして、彼は、そのときから、新たな生を生きることとなった。
そのときのことをヒュンケルは、感慨深く、思い返していた。
—見事なものだったな。
ヒュンケルは思った。
ダイは、剣技も不十分で、ようやく習得したライデインも、ヒュンケルには効かなかった。いや、彼が耐え忍んだというべきか。
そのあらゆる攻撃手段を封じられたその中で、ダイは、魔法と剣を合わせた新たな技を編み出したのだった。

—敵わんな・・・。
　ヒュンケルは苦笑した。
　思えば、あれが、ダイ必殺のライデイン・ストラッシュの初撃だったのだ。結果的に、ヒュンケルは、ダイを追い詰めることで、とんでもない必殺技を完成させる一助となってしまったのだった。
　その技が、後々までダイを支えることとなった。
　あのとき、ダイに敗れたヒュンケルは、首を落とされ、その人生はそこで終わるはずだった。
　だが、マァムは、それを許さなかった。
　彼が捨てたはずのアバンのしるしを返し、そして、あのときから、ヒュンケルの「アバンの使徒」としての人生が始まったのだ。
　マァムに標を示され、そして、クロコダインに文字通り、命を救われ、そこからいまの彼の生がある。
　だが、この地底魔城には、ヒュンケルにとって、それ以上の意味があった。
　目を閉じて、いまのこの溶岩にあふれた光景を消し、この闘技場を覆う気配だけを追いかける。すると、十数年前の光景がよみがえってくるようだった。
　この地は、彼の人生が大きく変わっただけの場ではない。
　彼が育ち、慈しみを受け、育まれた、故郷なのだった。
　彼が幼い頃、この地底魔城には、様々な魔族やモンスターが暮らしていた。
　その中には、彼の父の姿もあった。
　目を閉じたヒュンケルの瞼の裏に、在りし日のこの城の姿がよみがえった。
地下の回廊を行き来する、オークやがいこつ剣士。闘技場での、モンスター同士の訓練。父に対し、報告に訪れたトロール。幼いヒュンケルと遊んでくれたギガンテス。
　あのとき、ここには確かに一つの国があり、多くのものたちが息づいていた。
　だが、大魔王との戦いが終わったいま、ここに生命は一つもなかった。
　ヒュンケルが感慨にふけっていると、ふと、生きるものの気配を

感じた。気を探ることに長けた彼は、すぐにこの場にそぐわない生命の息吹に気付いた。
　そして、それが、何によるものなのかも。
　その気配は、少しずつ、彼に近づいてきた。
　声が届くところまで来たとき、ヒュンケルは、ゆっくりと振り返った。
　そこには思ったとおりの姿があった。
　ヒュンケルは声をかけた。
「先生。」
　その視線の先には、彼の師が佇んでいた。
　その彼は、ヒュンケルがよく知っていた、一緒に旅をしたアバンとは、その風貌も雰囲気も、幾分か異なっていた。アバンは、ヒュンケルが師事をしていたころよりも、落ち着いた雰囲気となって、重厚さが増し、その面にも少ししわが刻まれていた。
　年をとったな、とヒュンケルは思った。
　それはそうだろう。ヒュンケルのよく知っていたアバンは、まだ１０代だった。若かりし勇者だった。
　それが、今は、１０年以上の時を経て、大勇者と呼ばれるまでになっていた。
　アバンの風貌からは、彼らが離れていた時の重みが感じられた。
　アバンは、その腕に、大きな花束を抱えていた。
　純白の百合の花束だった。
　それだけで、彼が何をしにこの場を訪れたのか、ヒュンケルにはよくわかった。
　一方のアバンは、申し訳なさそうな顔をしていた。
「すみません・・・あなたの一人の時間を邪魔するつもりはなかったのですが・・・。」
「いいえ。
　問題ありません。」
　ヒュンケルは、直ちに答えた。その短い言葉はそっけなかったが、声色とは裏腹に、拒否を意味するものではなかった。
　代わりに彼は、別のことを尋ねた。
「どうやって入ったんです？この城は、見てのとおり、崩壊してい

ます。入口からの通路はここにはつながっていなかったでしょう。」
「簡単ですよ。
　私は、この城は来たことがありましたからね。この闘技場もそのときに入ったことがあります。」
　アバンは、得意げに片目をつぶって答えた。
　つまり、ルーラで入った、ということか。
　その割には着地音がなかったなとヒュンケルは思ったが、ルーラとトベルーラを併用すれば、音もなく着地できるのだということに思い至り、アバンならその程度、造作もないだろうと思った。
　相手に知られることなく高速移動ができるというのは、戦略上、とても重要だ。
　もしかしたら、アバンは、ヒュンケルの姿に気付き、トベルーラで衝撃を消して着地したのかもしれないと、ヒュンケルは思った。
　アバンは、いったん浮かべた得意げな笑みを消すと、言葉をつないだ。
「ここはね、空が見えるから、ここがいいと思ったんですよ・・・。」
　そう言って、アバンは、天を見上げた。
　この日は、曇天で、厚い雲が天上に広がっていたが、ところどころ雲間があり、そこから陽の光が覗いていた。
　アバンは、視線を下ろすと、ヒュンケルを見つめた。その目は、穏やかだった。
「でも、ここであなたに会えてよかった。
　少し、時間をいただいてもいいですか？」
「・・・はい。」
　アバンは、まっすぐにヒュンケルを見つめ、尋ねた。
「魔界に行くんですね。ダイくんを探しに。」
「ええ。」
「まだ、貴方の体は万全じゃないでしょう？それでも行くんですか。」
「ラーハルトが一緒です。俺も、一般の魔族やモンスター程度なら相手にできます。

問題ありません。」
　アバンは、少し目を細め、困ったような笑顔を浮かべた。こうと決めたら譲らない一番弟子の性格は、よく把握していた。
「そうですか・・・。
　あなたの決めたことなら、私が口をはさむことはできません。
　ですが、一つだけ、約束してくれませんか？」
　そしてまた、まっすぐにヒュンケルを見つめた。真摯な師の眼差しが、彼を射抜いた。
「必ず、生きて帰ってきてください。」
　その言葉に、ヒュンケルが苦笑した。
「・・・マァムにも同じことを言われました。
　俺は、よほど信用がないようです。」
　アバンも笑みを浮かべた。
「心配なだけですよ、私も、それに、マァムもね。」
　アバンは、声の調子を軽くすると、今度は別のことを口にした。
「帰ってきたら、カールに来てくださいね。
　あなたには、騎士団の指導をお願いしたいんですよ。」
「・・・正気ですか？」
　ヒュンケルは目を丸くした。
　アバンは、いま、カールの王宮に出入りしている。
　戦後まもなくであったために、まだその身の振りははっきりしていなかったが、女王フローラの側におり、今度こそ、おとなしく彼女に仕えるつもりのようだった。
　もっとも、フローラとアバンが互いに想いあっていることは、カール重鎮も分かっており、これがフローラの世継ぎをもうける最後のチャンスとばかりに、カール王宮は色めき立っている。
　いずれ、アバンは、彼女の王配になるのだろう。
　ヒュンケルもそう思っていただけに、そのアバンからのこの申し出は、意外であった。わざわざ旧魔王軍を身内に引き入れる必要はないはずだ。
　だが、アバンは、こともなげに答えた。
「もちろん。
　あなたほどの指揮力を誇る将はなかなかいませんからね。

是非。」
「女王のお考えはどうなんですか？」
「私と同じです。」
ヒュンケルはため息をついた。
どうも、この人には、常識というものが通じない。
「・・・先生、貴方は知っていますよね。
俺が、貴方と離れた後、どうやって生きてきたのか。
・・・何をしてしまったのか。」
すると、アバンは、痛まし気に瞳を揺らした。伏せた眼差しが彼の心情を物語っていた。
「・・・はい。
苦労を掛けましたね。
本当に、申し訳なかったと思っています・・・。
だから、あなたが生きていてくれて、私は本当にうれしかった。」
ヒュンケルは、それまではアバンから半身を逸らしていたが、ここでようやくアバンに向き直った。
苦い言葉が、彼の喉を上る。
ヒュンケルは、吐き出すように、訴えかけた。
「先生。
俺は、不死騎団長として、パプニカを一度は滅ぼしました。多くの命が、そのために失われました。その中には、パプニカ王、レオナ姫の父もあります。
俺は、貴方の名を汚すことしかしてこなかった。
その俺が、カールのために表立って働くこと、カールに実害を及ぼすとしか思えません。
俺は、罪人です。」
すると、アバンは、意外な言葉を口にした。
「・・・あなたの行ったことは、罪なんですか？」
ヒュンケルは呆れた。何を当たり前のことを言っているのだ、とばかりに眉根を寄せた。
「ほかのなんだというのです。」
「魔王軍として行動したから、ですか？」

「はい。」
　アバンは、畳みかけるようにヒュンケルに問いかけた。
「では、クロコダインは？ラーハルトは？ヒムは？
　彼らもみんな罪がある、とあなたは考えていますか？」
　みな、かつて魔王軍に属していた者たちだ。
　仲間の名前を出されると、ヒュンケルは弱い。彼らにも罪があるとはヒュンケルは考えていなかった。
　ヒュンケルは、かぶりを振った。
「・・・いえ・・・。」
　すると、さらにアバンは尋ねた。
「では、彼らとあなたとの違いは何ですかね？」
　もちろん、種族が異なる。あげられた名前の中で、純粋に「人間」という種族に属するのは、ヒュンケルだけだ。
　だが、アバンがそんな表面的なことを尋ねているとは思えなかった。
　ヒュンケルが答えあぐねていると、アバンは、笑みを浮かべながら全く別のことを問いかけた。
「ヒュンケル、ベンガーナ国境付近の町で見た、霊廟は覚えていますか？」
　まだ、ヒュンケルがアバンと一緒に旅をしていたころのことだ。
　不意に問われた幼い頃の思い出に、ヒュンケルは意外な印象を受けた。
　だが、あの純白の霊廟のことは、幼い彼の記憶の中に深く刻まれていた。
　ヒュンケルはうなずいた。
「はい。
　よく覚えています。」
　アバンは、満足げに笑みを浮かべた。
「あの霊廟の主について、少年だった貴方は、納得がいかないという顔をしていましたね。
　今は、どう思いますか？」
　アバンに問われ、ヒュンケルは答えた。あのころに比べ、様々な経験を経た彼には、当時には持ちえなかった視野が開けていた。

「あれも一つの生き方だとは思います。」
　すかさず、アバンは、問いを重ねた。
「では、彼を招き入れたベンガーナ王。
　その人が、あの将にした処分をどう思いますか？」
「処罰しないのは当然でしょう。
　有力な武将を麾下に入れるんです。王としては、自軍に与えた損害よりも、その先の利益、その将の持つ能力に注目するのは当然でしょうね。」
「では、レオナ姫のあなたに対する判断は？
　どう思っているんですか？」
　ここでアバンは、突如、切り口を変えた。
　彼特有の、問答を通じて、その答えを自分で考えさせるやり方に、ヒュンケルは懐かしさを感じた。
だが、それと同時に、問われた内容の重さに戸惑った。ヒュンケルは、慎重に言葉を選んだ。
「・・・感謝、しています。」
　アバンは、ヒュンケルの回答を受け止め、うなずいた。
「あなたは、パプニカにとっては、投降の将、敗残の将と同じです。
　それに対して処罰ができるのは、ただ一人、敵対国であった国の指導者、パプニカ王不在の今は、レオナ姫だけです。」
　アバンは、言葉をつづけた。
「そのレオナ姫が、あなたにアバンの使徒として生きることを命じた、ということは私も聞きました。
　もちろん、姫個人の思いもあるでしょうが、姫は、国の指導者としての判断を優先し、あなたにそのような処分を下した。
　若いのに立派ですよね。
　あれがすべてです。
　あなたを処罰できる人は、もうこの世に誰もいないんですよ。」
　ヒュンケルは何も答えなかった。
　だが、アバンは構わず、ヒュンケルに語り掛けた。
「あなたは、実際に、文字通り、その身を盾にして、パプニカのため、世界のために大魔王と戦った。

そのあなたを、今になって処罰したら、それこそ、パプニカの威信にかかわります。だからもう、あなたを処罰することはできないんです。」
　すると、ここでようやく、ヒュンケルが口を開いた。
「でも、個人の思いはまた別でしょう。」
　以前も同じことをヒュンケルは、アバンに尋ねた。あの霊廟の街で。アバンは、それを思い出したのだろうか、懐かしそうに微笑んだ。
　アバンはうなずいた。そして、ヒュンケルの考えを否定しなかった。
「そうですね。
　もちろん、あなたに恨みを感じる人はいるでしょうね。
　ただ、それも、表立った行動や非難にはなることは、少ないでしょう。」
　あまりにもはっきりとした断定だった。アバンがこのような言い方をするのは珍しい。
　ヒュンケルはいぶかし気に尋ねた。
「何故そんなことが言えるんです？」
　すると、また、アバンは明快に答えた。
「あなたに危害を加えることは、罪になるからですよ。」
　アバンは、言葉をつづけた。
「あなたに対する処分はもう終わっています。
　今後、あなたに対する扱いはほかの市民と同じです。
　これからは、パプニカの法があなたを守る。」
　ヒュンケルが一度は滅ぼしたはずのパプニカ。そのパプニカの法が、今度はヒュンケルを守る、という。その言葉の重みをヒュンケルはかみしめた。
「誰だって、過去よりも現在が大事です。
　だから、その法を犯してまで、あなたに危害を加えようという者は、ずっと少なくなるはずです。
　もちろん、すべてをなげうってでも、と思い詰める人がいないとは限りません。ですが、それはかなりレアケースとなるでしょうね。」

アバンは、さらに語った。
「あなたを処罰することができるとしたら、それは、今後のあなたの行動に対してだけです。
　だからこそ、あなたの行動は注目されるでしょう。
　それこそ、上げ足も取られるかもしれない。
　揶揄されることもあるかもしれない。
　あなたを恨みに思う人からすれば、あなたの行動のすべてが、批判の対象になりうるのです。
　・・・怖い、ですか？」
　ヒュンケルは、うなずいた。
「怖いですね。
　そのことで、俺の周りにいる人まで巻き込んでしまうかもしれない。そう思うと、怖いですよ。」
　アバンは、穏やかに笑った。
　この子は、こんなふうに自分の弱い内面を語れる子ではなかった。ヒュンケルの言葉に、アバンは彼の成熟を感じた。
　アバンは、不意に闘技場を吹き抜ける風を感じた。視線を上げると、無人の観覧席が目に入った。
　アバンはつぶやいた。
「・・・静かですね。」
「もう、誰もいませんからね。」
「ええ・・・。
　でも、ここには、１５年前、確かに一つの国があったんですよね。
　魔族やモンスターがひしめき合って暮らしていた国が。」
　アバンの脳裏にも、ヒュンケルと同じ１５年前の光景がよみがえっていた。
「ヒュンケル、あなたがパプニカを攻めたことが罪ならば、私も同じ罪を背負っています。
　だってそうでしょう？
　この地底魔城に攻め入り、この国を滅ぼし、そして、その私の行動で家族を失った人がいた。
　その罪も、責任も、私の背負っているものです。」

ヒュンケルはかぶりを振った。
　長い間、アバンを誤解して恨んでいたこと、それについて語らなければならない、謝らなければならない。
　アバンと再会してから、ヒュンケルは、ずっと、そう思っていた。
　そのときは、いましかなかった。
「先生、それは違います。
　貴方は、俺の父の仇ではなかった。」
　アバンはうなずいた。
「ええ、マァムから聞きました。
　バルトスさんの言葉を聞けたんですね。それを聞いて、私は本当にうれしかった。あの方の言葉が、あなたに届いたんだとわかって。」
　そう言って、アバンは、心から嬉しそうに微笑んだ。
「でもね、ヒュンケル、あそこでバルトスさんが道を開けなければ、私は彼を倒すつもりでした。ハドラーなくしては彼は命をつなげないと知って、それでも私はハドラーを倒した。
　結果的に、バルトスさんに直接手を下したのは、ハドラーでしたが、それもめぐりあわせだけの話で、私が彼の命を奪ったと言っても、過言ではありませんよ。」
　それは、アバンが以前から思っていたことだった。
　ヒュンケルは、それは違う、と声をあげようとした。
　だが、その気配に気付いたのか、アバンは、軽く手を前に出し、ヒュンケルの発言を制止した。そして、代わりに、別のことを尋ねた。
「ヒュンケル、あなたは、いま、ハドラーをどう思っていますか？」
　残酷な問いだった。
　だが、いまとなっては、ヒュンケルもハドラーには別の思いがあった。
　ヒュンケルは答えた。
「・・・最後は、立派な武人であったと思います。
　戦いの中に己を全うして、あれも一つの生き方だと思いました。

以前の俺なら、うらやましく思ったことでしょう。」
　ヒュンケルは過去形で答えた。
　その意味をアバンは感じ取り、やはりうれしそうに微笑んだ。
「ハドラーをバルトスさんの仇だ、とは思わないんですね。」
「ええ・・・。
　・・・父がなぜ、亡くなったのか、その本当の原因に気付きましたから。」
　ヒュンケルは、まっすぐにアバンを見つめた。
　そして、はっきりとした口調で答えた。
「父を死なせたのは、俺です。」
　揺るぎのない言葉だった。
　そのまま、アバンの制止を許さず、言葉をつづけた。
「俺がいなければ、父は、地獄門を貴方に明け渡すことはしなかった。騎士として、最後まで戦ったはずです。
　そして、あなたを通さなければ、ハドラーの怒りを買うこともなかった。
　俺のために、父は命を落としたのです。
　ハドラーを仇と思うのも、ましてや貴方に恨みを向けるのも、お門違いです。」
　アバンは、痛ましげに瞳を揺らした。
　いつか、彼がこのような結論を出してしまうと思っていたのだろう。
　一見、自虐的とも思えるその言葉を、だがアバンは否定しなかった。
「それでも、バルトスさんは、あなたに生きてほしかったのでしょう。自分の身がどうなったとしても。」
　アバンは、そのまま言葉をつづけた。
「私には子どもはいません。でも、弟子のあなたたちみんなが私の子どもみたいなものです。
　デルムリン島でハドラーと対峙した時、私は、彼を止められないと思いました。私の力が及ばないと。
　でも、どうしても、ダイくんとポップ・・・あの子たちは助けたかった。ブラスさんもゴメちゃんも、デルムリン島のみんなも。

あのときに思ったんです。
　バルトスさんも似た気持ちだったのかと。
　私でさえそう思ったんですから、あなたを何年もの間、慈しんで育てたバルトスさんは、もっと強くそう思ったんだろうと、ね。」
　アバンは、懐かしそうに語った。
　「似た気持ち」という控えめな表現に、ヒュンケルは、アバンのバルトスに対する深い敬意を感じた。
「ヒュンケル、親というのはそういうものですよ。自分がどうなっても、子どもの生きることを優先してしまう。
　だから、あなたが生きてくれて、バルトスさんは、喜んでいると思います。
　あなたも親になれば、わかりますよ。」
　アバンの最後の言葉に、ヒュンケルは自嘲した。
「・・・そんな日が来るとは思えませんがね。」
　そして、ヒュンケルは、話題を少しだけ変えた。
「先生。貴方は、俺が、子どものころから、魔族の文字も地上の文字も読めることを知っていましたね。世界地図も見たことがあったことも。
　誰が俺にそれを教えたのか、あの頃から、貴方は知っていたんですね。」
「なんとなく、ですけどね。」
「文字も地図も、俺に教えてくれたのは父です。
　地底魔城では魔族文字しか使っていなかったのに、あえて、地上の文字で書かれた絵本を俺に与えた父の思いが、いまならわかる気がします。」
　バルトスは、ヒュンケルに生きる術を教えようとした。
　あのとき、あまりにも幼かった彼に、それでも最低限の知識と経験を与えようとしたのだ。
「先生、貴方も同じです。
　貴方は俺に世界を見せてくれた。
　旅先で、様々な文化や職業、人々に触れ合わせてくれました。
　貴方は路銀のためだと嘯（うそぶ）いていましたが、本当の目的は違いましたよね。

貴方は、俺に人間の社会を見せてくれようとしていた。
　そうですね。」
　それは、質問ではなかった。
　ヒュンケルは、アバンの答えを待つまでもなく、己の言葉が正しいと確信していた。
「貴方と旅をした２年間が、俺の地上での経験のすべてでした。
　でも、貴方が、あれだけ様々なものを俺に見せてくれたから、俺は、ダイたちと一緒に行動をするようになっても、困ることはなかった。
　ようやく、貴方の行動の意味が分かりましたよ。」
　すると、アバンは、困ったような笑みを浮かべた。
「お金がなかったのも本当ですよ。」
　ヒュンケルは苦笑した。
　アバンは、笑みを消し、ヒュンケルに向き直った。
　そして、彼に問いかけた。
「それでは、私からの最後の質問です。
　先ほども聞きましたね。
　あなたに罪があるのか。
　あるならば、それは何か。
　もう一度聞きます。
　クロコダイン、ラーハルト、ヒム。
　彼らとあなたの違いは何ですか？」
　ヒュンケルは答えをためらった。ぐっと息を呑む。
　すると、言いあぐねているヒュンケルに対し、アバンが穏やかに語り掛けた。
「聡いあなたならもうわかっているでしょう。
　問題は、あなたの心の中にあります。
　あなたは、魔王軍にいたことを後悔している。
　それが彼らとあなたとの違いです。
　だから、ですね？」
　ヒュンケルはうめくようにうなずいた。
「・・・はい・・・。」
　そんな彼を、アバンは痛まし気に見つめた。

「そして、あなた自身が、戦いで家族を失った遺族だった。だから、自分が加わった戦いで亡くなった人やその遺族の痛みを、我が事として強く感じてしまう。
　その苦しみは、私にもわかります。同じく、一国を滅ぼしたことは、私も同じですから。
　私はね、そんなあなたの優しさが大好きですよ。
　でもね、そのことで、あなたが必要以上に苦しみ、罪を感じるのなら、その重荷を下ろしてほしいと思うのです。」
　ヒュンケルは、魔王軍として、パプニカを攻めた。彼自身の意志もそこにはあった。そして、そのために、多くの命が失われた。それは事実だ。
　だが、それは、バーンの指示のもと。そしてそれに対する裁きは終わっていた。
　しかし、何よりも、ヒュンケル自身が己を許せていなかった。
　アバンはそれを突き付けた。
「ヒュンケル。私もあなたと2年間、一緒に旅をしました。育てた、と言えるほどのことはしていませんが、貴方も私の子どものようなものです。
　・・・大きくなりましたね。
　本当に良かった。
　あなたが今も様々な痛みを背負っていることはわかっています。でも、あなたの保護者だった者の一人として、私は思います。
　あなたには、自分の望むものを手にする生き方をしてほしい、と。」
　ヒュンケルは、アバンの言葉をかみしめた。
　過去は消せない。
　自分の過去の行いは、たとえ法的に処罰されることはなくとも、人々の心の中に残っている。
　そして、処罰されることがもうないからこそ、今後は、己の生き方で示していくしかないのだ。
　それでも、アバンは、ヒュンケルの幸福を願っていた。その切なる思いをヒュンケルは感じ取った。
　ヒュンケルは、己の背を押す師の見えない手を感じていた。

ヒュンケルは、笑みを浮かべた。穏やかな表情だった。
彼は、師に問いかけた。
「先生。」
「何ですか？」
「俺は、ようやく、貴方から卒業できた気がします。」
すると、アバンは、片目をつぶって答えた。
「あなたはずっと前から、とっくに私を超えていますよ。」
そして、過去に想いを馳せながら、言葉をつづけた。
大魔王の宮殿での戦い。
わずか数週間前の出来事であるのに、ずいぶん前のことのように感じられた。
「私がバーンパレスに駆け付けたとき、あなたたちは、クロコダイン、ラーハルト、ヒム、チウたちとともに、大魔王に立ち向かっていた。
その姿を見て、私は感銘を受けたんです。
私が目指していたことを、あなたたちは自然に掴み取っていた。
魔族もモンスターも人間もない。
この地上に生きる命が互いに手を取り合える世界、それが、あの戦場で、現実のものになっていた。
私はそこに感動しました。
あなたがたは、みんな、私の誇りです。」
あの日、大魔王の宮殿で聞いたのと、同じ言葉をアバンは口にした。
そうして、穏やかに微笑んだ。
ヒュンケルは、師の笑顔を見つめながら、過去に想いを馳せた。
初めてこの城でアバンと会った時のこと。
カールで意識を取り戻し、彼に斬りかかったとき。
アバンと２人の旅が始まり、様々な土地を訪れた。
同行の仲間が増え、また多くの村や町を巡った。
そして、最後、アバンに対する膨れ上がった憎しみを抑えきれず、襲い掛かったあの日のことを。
こんなに穏やかに、この人と語り合える時が来るとは思わなかった。

ヒュンケルはそう感じていた。
　だがそれも、アバン、そしてヒュンケルのたどってきた旅路があってこそだった。
　アバンは、ヒュンケルに尋ねた。
「ヒュンケル、１３年前の続きに、お付き合いいただけますか？」
「もちろんです。」
　アバンは、闘技場の真ん中に足を進めた。ヒュンケルもその背を追う。
　一歩、足を進めるごとに、尖った溶岩が足を刺す。その痛みを感じながら、この地で失われたモンスターたちの命を思った。
　アバンは、その荒れた大地に、手にしていた純白の花束を下ろした。
　そして、その前に跪き、胸に手を当て、軽く頭を垂れた。
　その閉じた瞳が、横顔から垣間見える。
　祈りを捧げているのだと、すぐに分かった。
　ヒュンケルもそれに倣う。
　やがて、アバンは、その花束の前に、何かをそっと置いた。
　ヒュンケルは目を見張った。
　それは、紫紺のとんがり帽子だった。
　１３年ぶりに目にしたそれに、ヒュンケルは一瞬で過去に引き戻された。
　オレンジ色の体を持った、大きな目、長い舌のモンスター。
　人を食ったようなその笑顔が、その呼び声が蘇る。
―ヒューー－ン。
　すぐ隣に、あいつがいるような気がした。
　ヒュンケルは、上ずった声でアバンに尋ねた。
「それは・・・バケルの・・・まさか、ずっと持っていたんですか？」
「ええ。
　約束したでしょう？３人でここに来ようって。」
　そう言って、アバンは微笑んだ。
　アバンは、とんがり帽子に目を落として呟いた。
「バケル、長いこと待たせましたね・・・。」

そして、もう一度、アバンは目を閉じて、祈りをささげた。
　アバンは、しばらくの間そうしていたが、やがて、小さく呪文を唱えた。
　アバンの指先から、小さな炎が零れ落ちた。
　その火は、瞬く間に、バケルの帽子を、百合の花束を包んだ。
　炎は、静かに燃え上がり、煙が緩やかに上がった。
　アバンは、静かに祈りをささげた。
「この地底魔城に眠る、すべての魂たちよ。
　あなた方に、安らかな眠りが訪れんことを。」
　アバンの言葉とともに、煙は空へと昇っていく。
　ヒュンケルは、その煙を目で追いながら、天に視線を向けた。
　亡き者への思いが、天へと昇る。
　すべての魂。
　その中には、彼の父やこの地底魔城にあったモンスターたち、さらには、モルグをはじめとした、彼の部下たち、バケルの思い出があった。
　その煙を瞳に映しながら、ヒュンケルは思った。
　１５年前に始まったアバンとの旅が、ようやくここで終わったのだ、と。

　指導してくれる者はもうない。
　これからは、自分の足で、自分で選ぶ道を生きていかなければならないのだ。
　その過去と責任をすべて背負い、引き受けながら。

　彼自身の、あるべき未来に進むために。

終